

進捗状況の概要 ※得られたアウトカムを含む構想の実現の観点から記載すること【1ページ】

## 【Ⅰ. 人材の魅力化】

### (1) 海外一線級ユニットの誘致

本学の強み・特色である、「デザイン・建築」、「繊維材料・高分子」、「グリーンイノベーション」の3つの分野において、研究ユニットの誘致を中心とした国際共同プロジェクトを積極的に展開しており、組織再編があった平成28年度からの4年間で延べ166件実施し海外大学等延べ209機関との協働を行っている。

### (2) 教員海外派遣による教員組織の国際新陳代謝

ケンブリッジ大学、ハーバード大学など、平成27年度から毎年10名程度の教員を海外に長期間派遣し延べ47名を派遣したことにより国際共著論文や学生の受入など国際ネットワークの形成を図っている。

### (3) 職員の高度化への取り組み

大学の国際化に寄与する人材を育成するため、平成27年度から令和元年度にかけて、職員を海外の教育研究機関等へ長期1名、短期15名、語学学校へ短期6名の派遣を行った。また、英語研修の実施とともに、TOEIC730点以上取得者割合が5.5%から16.7%へ3倍以上増加するなど職員の国際通用力が向上した。

## 【Ⅱ. 場の魅力化】

### (1) 交流スペースの設置

海外研究者や地元企業との交流スペース「TECH SALON」を設置し、シンポジウム等交流活動を行った。また、附属図書館内にグローバルコモンズを設置し、留学生と日本人学生の共同学習や他国の文化に触れるイベントで利用するなど日本人学生の留学の動機付けを行うなどし、単位取得を伴う留学経験者数は平成25年度72名から令和元年度385名へと大幅に増加した。

### (2) 海外拠点の設置

海外インターンシップ事業の拠点となるオフィスをタイ王国に3ヶ所設置した。この拠点を利用し、ASEAN諸国における教育研究活動を展開している。また、欧州における海外展開の拠点として、平成30年12月にはイタリアのトリノ工科大学内に本学オフィスを開設した。

## 【Ⅲ. カリキュラムの魅力化】

### (1) 3×3 構造改革、クォーター制によるカリキュラム・学年暦の魅力化

学士課程から博士前期課程までの6年一貫教育の実質化を図る3×3構造改革を実施した。この改革による学部4年次の大学院科目の先行履修やクォーター制を取り入れた学年暦・学事暦の柔軟化により、多数の学生が海外インターンシップへ参加するなどTECH LEADER(国際高度専門技術者)養成のための教育システムを構築した。

### (2) 英語鍛え上げプログラムの実施

「聴く」「読む」「話す」「書く」の4技能の向上を目指し、毎授業の課題やe-learningを用いた多読・多聴の実施による多量のインプットを行う授業を展開した。また、TOEICスコアレベルを基準とした科目設計や英語スピーキングテストを授業に取込んだカリキュラムを平成28年度に導入したことにより平成28年度入学者のTOEICスコア730点以上を取得する学生が入学時17名であったのが卒業時には151名へと8.9倍(平均点は491→626点へアップ)になるなど外国語運用能力を着実に向上させている。

### (3) 海外大学とのジョイントディグリープログラム(JDP)、ダブルディグリープログラム(DDP)

平成29年4月に京都工芸繊維大学・チェンマイ大学国際連携建築学専攻(JDP)を開設した。また平成30年度よりトリノ工科大学、令和元年度よりベニス大学カ・フォスカリ校とのDDPもスタートし、学生の交換交流を開始した。並行して、ミラノ工科大学、パドヴァ大学、ベルガモ大学等、多数のイタリアの大学との協定を締結しており、ヨーロッパとの関係の深化において重要な役割を果たしている。

### (4) 国際化モデル研究室事業の実施

国際化を先導する「国際化モデル研究室」を延べ88研究室指定し、学生の国際学会発表支援、海外大学との国際教育事業、外国人研究者による授業・研究指導を実施した。

## 【Ⅳ. TECH LEADER】

TECH LEADERの養成数についてこれまでに取り組んだ課題解決力を醸成させる課題解決型学習(PBL)や英語教育(英語鍛え上げプログラムなど)の成果が顕著に表れてきている。

## 特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ】

## ○海外一線級ユニットの誘致（進捗状況の概要Ⅰ(1)に対応）

英国のデザイン雑誌「Design Week」より「Hot 50：デザイン業界で最も影響のある50名」に選出された英国王立芸術学院シニアリサーチフェローであるジュリア・カセム氏を特任教授として迎え、また、建築分野における世界的権威であるプリツカー賞を受賞した建築家であるジャック・ヘルツォーク氏を招聘し、講演や学生への指導を行うなど、世界的影響力を持つ大学・機関、人物との協働が増え、研究者の派遣依頼や、国際連携教育プログラムの打診が相次ぎ、本学の社会的評価は高まっている。平成28年度には、招致した研究員がダッチ・デザインアワード2016（オランダにおける世界レベルのデザイン賞）サービス＋システム部門賞を受賞し、平成30年度には世界的に認知度の高いデザイン誌AXIS vol.195「特集 | 世界のデザイン大学2018」にD-labの取り組みがトップ掲載された。さらに、KYOTO Design Labが毎年発行しているイヤーブックが「iF DESIGN AWARD」を受賞した。

## ○教員海外派遣による教員組織の国際新陳代謝（進捗状況の概要Ⅰ(2)に対応）

英語による教育力向上や海外大学等とのネットワーク強化を目的に、若手教員を毎年10名、最長1年にわたり海外へ派遣し、教育に係る実績を積ませた結果、本学の教員3人に1人が外国での教育研究歴を持つというグローバル化を推進できる環境となった。また、この派遣がきっかけとなり、海外大学と共同で博士後期課程学生の研究指導を行うコチュテル・プログラムについてオルレアン大学と協定を締結する等カリキュラムの国際化が進展した。また、平成26年度から令和元年度にかけて、協定校数が54機関から107機関へ拡大した。

## ○交流スペースの設置（進捗状況の概要Ⅱ(1)に対応）

グローバルコモンズでは、様々な国の映画上映、言語パートナーとの仲介、留学生スタッフとの留学前相談等を実施し、毎年年間約5,000名が利用している。そのような取り組みもあり、単位取得を伴う留学経験者数は平成25年度72名から令和元年度385名へと大幅に増加した。

## ○3×3構造改革、クォーター制によるカリキュラム・学年暦の魅力化（進捗状況の概要Ⅲ(1)に対応）

学士課程から博士前期課程までの6年一貫教育の実質化を図るため、学士4年、修士2年、博士3年の年次構造を事実上3年毎の進行区分に組換える3×3構造改革を実施した。この改革により、学部4年次の大学院科目先行履修が可能となった。また、クォーター制を取り入れ、学年暦・学事暦を柔軟化し、留学を促す環境を整備した。その結果、平成25年度から令和元年度にかけて、海外への学生派遣は89名から259名、海外からの学生受入は74名から313名へ飛躍的に増加した。

また、クォーター制科目は31.5%から49.3%に増加した。

## ○英語鍛え上げプログラムの実施（進捗状況の概要Ⅲ(2)に対応）

多読多聴を行う英語鍛え上げプログラムを2年生までに受講した平成28年度入学者は、入学時から卒業までの4年間でTOEIC630点以上取得者が入学時の58名から319名へと5.5倍に上がった。なお、730点以上についても取得者が入学時の17名から151名へと8.9倍に上がった。また、英語発信能力を測定するため、独自にCBT英語スピーキングテストを開発し、授業や入試に活用している。

## ○海外大学とのジョイントディグリープログラム（進捗状況の概要Ⅲ(3)に対応）

国内初の博士前期課程、国内初の工学分野でのジョイントディグリープログラムである、京都工芸繊維大学・チェンマイ大学国際連携建築学専攻を平成29年4月に開設し、これまで本学側の学生8名が入学し、すでに3名が卒業した。また、タイ側では学生7名が入学し、2名が卒業した。

## ○国際化モデル研究室事業の実施（進捗状況の概要Ⅲ(4)に対応）

英語による論文指導等国際学会での学生の発表支援の結果、分子生物学分野で権威のあるコールドスプリングハーバー研究所国際ミーティングで論文を発表し、その業績により、ハーバード大学研究職に就職した。また、学生交流プログラムの開発に取り組んだ研究室では、サマープログラムや本学の学生が海外の学生との企業訪問等を実施しこれまで海外から学生825名を受入、海外へ896名の学生を派遣した。

## ○TECH LEADER

TECH LEADERの養成数は、平成26年度より増加傾向にあり、本事業終了時には達成目標数を見込んでおり、地域企業の課題を解決しうる人材として地域社会へ輩出する。